

仲介 (mediation) 活動の検討

—国際共修日本語読解授業の場合—

Toward a Case Study of Mediation Activities:
Through Japanese Reading Activities in An International Collaborative Class

三宅若菜

キーワード：仲介 (mediation), CEFR-CV, 読解授業, 読解ストラテジー

1. はじめに

人口が減少し将来の見通しが予測不可能な時代において、大学は18歳で入学する日本人を主な対象として想定する従来のモデルから脱却し、「多様な価値観を持つ多様な人材が集まることにより新たな価値が創造される場」(中央教育審議会 2018: 14)として、社会人や留学生を積極的に受け入れることへの転換が求められている。この答申では、2040年に求められる人材像として、基礎的で普遍的な知識・理解と汎用的な技能を持ち、その知識や技能を活用でき、ジレンマを克服することも含めたコミュニケーション能力を持ち、自律的に責任ある行動をとれる人材を掲げている(中央教育審議会 同)。

答申に基づき、大学は自らの認識を高めて多様な学生を受け入れる体制を整備していくことが重要であるが、現場では必ずしも明確な指針のもとで教育が展開されているわけではない。そこで、本稿では、国際共修クラスとして位置づけられている日本語読解授業における活動の今後の指針を得るべく、2020年に公開されたCEFR随伴版(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment companion volume with new descriptors 以下、CEFR-CV2020)における仲介(mediation)活動について検討することにした。

2. CEFR随伴版における仲介(mediation)

2001年に欧州評議会が公表したCommon European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment(以下、CEFR2001)は、人々が相互にコミュニケーションすることが重要課題であるとの認識のもと、ヨーロッパ域内で使用される各言語に対し、「シラバス、カリキュラムのガイドライン、試験、教科書、等々の向上のために一般的基盤」(Council of Europe 2001 吉島・大橋訳 2014: 1)を提供している。CEFR2001では、

仲介 (mediation) 活動の検討

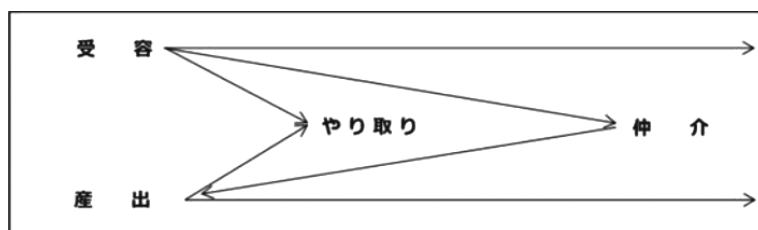


図1 受容・産出・やりとり・仲介の関係 (Council of Europe 2020 吉島・大橋訳 2024 : 35 抜粋)

複言語・複文化主義を主張し、個人の言語能力に焦点を当て、さまざまなレベルで複数の言語が相互補完的に使用されることを肯定的に捉えている。また、学習者を社会の中で行動し、学習の過程で実行者として働く「社会的存在 (social agent)」として捉え、言語を使って何をするかに重点を置いた行動主義アプローチを採用している。CEFR という共有言語を通じて、教師だけでなく学習者も、コミュニケーション手段としての言語の教授・学習を発展させ、知見を共有し、議論を交わすことが可能になる。

CEFR-CV2020¹⁾では、「仲介 (Mediation)」の視座がCEFR2001より拡張された。CEFR2001における仲介では、話し言葉での仲介と書き言葉での仲介があり、それぞれ同時通訳、逐次通訳、インフォーマルな通訳、正確な翻訳、文学の翻訳、第二言語同士または第一言語と第二言語との間の要約の翻訳、書き換えの例示に留まっていた。

CEFR-CV2020では、「受容 (Reception)」・「産出 (Production)」・「やり取り (Interaction)」に加えて「仲介」をコミュニケーション言語活動の一つとし、図1に示されるように、仲介は「受容」・「産出」・「やり取り」の上位に位置づけた。CEFR-CV2020が仲介能力に注目した理由として、西山 (2018) は、「言語に関わるだけではなく、複数の文化にも関わるもので、異なる言語や文化の衝突などを避ける仲介者にも求められる能力である」ためとしている。

また、CEFR-CV2020では仲介に関する「言語能力記述文 (Can-do)」が新たに提示され、複数の文化の仲介、さらに新たな知の獲得を仲介する教師や、やりとりを通じて意味を協働で構築する学生にとっても必要な能力であると定めた。CEFR-CV2020における仲介活動の言語能力記述文を形態素解析した結果によると、仲介の際に補助や条件が必要で他者による協力に依存しながら仲介する、主導はできないが一人から少数の他者を相手に仲介する、協働的かつ主体的に仲介する、と仲介者像を段階的に提示していることが指摘されている (櫻井・奥村 2021)。CEFR-CV2020ではCEFR2001の仲介の範囲を超えて、グループでの協働的な作業、意味を協働で構築することや、異なる文化背景を持つ者同士のコミュニケーションといった側面に注目していることがわかる。

筆者が担当する日本語読解授業は国際共修クラスとして位置づけられており、多様な文化的背景を持った人が集まる学習環境となっている。当該授業はコミュニケーションを扱う教

育であることを考えると、「多様な価値観を持つ多様な人材が集まることにより新たな価値が創造される場」(中央教育審議会 2018:14)としての交流を促進するために、どのようなコミュニケーション能力の育成が実現可能かを考慮すべきである。江澤(2020)は、CEFR-CV2020で提示された仲介活動について、日本のスペイン語教育での学習活動から検討している。本稿においても、当該授業を具体的に検討すれば、授業活動の指針を得ることができるのではないかと考えた。

3. 授業の概要

筆者は、2021年度より当該大学において、全学生を対象にした総合教育科目『ベーシック科目』群に位置づけられる「日本語表現」を担当している。授業は、大学学部2年生以上を対象とし、留学生も参加する国際共修クラスで、1回90分、全15回である。学生の所属学部は、経済、経営、コミュニケーション、現代法学であった。成績評価は、各活動への取り組みや、毎回のレポート等の提出物を中心に総合的に評価した。一回の授業における読解ストラテジー獲得を目的とした活動の流れを表2に示す。

毎回授業の前半では、社説等の主張が明確な新聞記事を読み、「計画」・「モニター」・「問題解決」・「評価」のプロセスを意識しながら、学習のメタ認知モデル(Chamot et al. 1999)を活用した読み方を学んだ。「計画」・「モニター」・「問題解決」・「評価」のプロセスに関わる読解ストラテジー(藤田他 2017 表3参照)を毎授業一つずつ学習し、その活用を促した。活動は4-5人のグループで行い、文章のどの部分で読解ストラテジーをどのように使ったのか、その読解ストラテジーを使用してみてメリット・デメリットについてどのように感じたのか、などについて話し合った。授業後には、振り返りシートを作成し、グループでの意見交換をもとに、ストラテジーの使用法やその効果をまとめた。また、学期末には、ポートフォリオを作成した。これまで学んだ全てのストラテジーについて振り返り、使いやすかったストラテジーや使いにくかったストラテジーに分け、その理由を総合的に分析した。

授業後半では、1学期中に新書を一冊読み切ることを目的とした活動を行い、学んだ読解ストラテジーの使用をさらに促した。グループは、学生が選んだ新書により編成され、書籍の内容に関する確認や検討、意見交換を行った。また、グループ活動後には、意見交換の内容とそれに対する自分の考えをまとめ、理解を深めることを促した。書籍を読み終えると、クラス内でリーフレットを発表し、意見交換を行った。書籍の内容を知らないクラスメイトに書籍の内容や自らの考えについて言語化することや、クラスメイトとの質疑応答により、他者の視点からの気づきを促した。作成されたリーフレットは大学図書館に紹介する新書とともに展示され、図書館ホームページへも掲載された²⁾。

仲介（mediation）活動の検討

表2 読解ストラテジー獲得を目的とした授業活動の流れ（1回90分）

授業活動		目的	
		読解ストラテジーの獲得	読解内容の理解促進
前半： 読解ストラ テジーの練 習	新たなストラテジーの学習	新たな読解ストラテジーについて、使用方法やその効果等を教師から学ぶ。	
	論説文（主に社説）の読解	新たに学んだ読解ストラテジーについて使用方法やその効果等を確認しながら、論説文を読む。	
	読解ストラテジーのプロセスについて意見交換	自らの読解ストラテジーの使用を言語化する。他者と比較・対照を行う。	
	振り返りシート（事後学習）	読解ストラテジーの使用について分析・考察することで意識化する。	
	ポートフォリオ作成（学期末）		
後半： 新書を読む	該当箇所について読解・内容の要約・議論点提示（事前学習）	読解ストラテジーを意識しながら読む。	<ul style="list-style-type: none"> ・書籍の内容について要点をまとめる ・自らの考えについて言語化する。
	該当箇所について内容および使用した読解ストラテジーを発表	使用した読解ストラテジーを意識化する。	書籍の内容や自らの考えについて発表する。
	質疑応答 グループメンバーと内容について考察する		<ul style="list-style-type: none"> ・書籍の内容について他者の視点をもとに考察を深める。 ・自らの考えについて言語化する。
	振り返り 質疑応答の内容をまとめ、振り返る（事後学習）		書籍の内容について分析・考察を深める。
	リーフレット作成 作成したリーフレットについて他グループと意見交換		書籍の内容や自らの考えについて言語化・視覚化する。書籍の内容について他者の視点からの気づきを促す。

表3 授業で学習した読解ストラテジー

	読解ストラテジー	内容
1	読む前に準備する	読む前に、タイトルから内容を予測したり目標を設定したりするなどして何のために読むのかを明確にする。
2	知っているルールを利用する	接続詞、構成の型などこれまで学んだルールを使い、内容理解の手がかりにする。
3	自分の知っていることや経験に引きつけて考える	自分の持っている知識や経験に当てはめたり身近な言葉でいいかえたりして理解を深める。
4	焦点をしぼる	焦点を絞る箇所を決め、効率的に読むようにする。
5	ときどき止まってメモする	読んでいる途中で、自分が読んできた内容をまとめたり、強調するべき点にしるしをつけたりしながら読み、内容理解の手がかりにする。
6	図や表を利用する	文章と図表を対応させながら読む。
7	周りの情報からことばの意味を推測する	前後で使われていることばや内容からわからないことばの意味を推測する。
8	質問して確認する	認識していることや理解していることを相手に示しながら具体的な質問をすることで、理解を深める。
9	読んだ後、理解度を自己評価する	読んだ内容について振り返り、内容について理解を自分で評価する。
10	ストラテジーの選び方・使い方を自己評価する	これまで学んだストラテジーをどのように使って読んでいるかを意識しながら読む。

4. 仲介活動能力を養う教育の検討

CEFR-CV2020における仲介活動と仲介方略を取り上げ、仲介活動能力を養う教育について当該授業をもとにどのように実現可能であるかについて、授業から想定できるレベルの言語能力記述文の内容をもとに具体的に検討していく³⁾。

4.1 テクストの仲介

CEFR2001における仲介から拡張され、テキストを自分自身のために仲介すること（例えば、講義の間のノート取り）や、創作的テキストに対する反応を表現することも含む。テキストの仲介活動として想定されているのは、以下の7つである。

1) 特定情報の引き継ぎ

必要な情報を取り出し、それを他の人に、書き言葉または話し言葉で伝え仲介をする活動

仲介（mediation）活動の検討

である。言語能力記述文は、なじみのあるテキストの一部から特定の情報を引き継ぐ（B2）、長くて複雑なテキストの一部から詳しい情報を伝える（B2）とある。単に情報を伝えるだけなので、Cレベル以上の言語能力記述がない。また、ここでは、必要となる特定の情報を取り出すことに注目しており、テキストの論理展開ではない。

当該授業活動では、読解ストラテジーを学ぶ学習において、読解ストラテジーのプロセスについて意見交換するとき、文章のどの部分で読解ストラテジーをどのように使ったのかを説明する場面が想定できる。新書を読む活動においては、担当する該当箇所について質疑応答をするときに、特定の箇所を抜き出して議論するような場合が想定できる。

2) データの説明

グラフや図などデータに関する情報について、他の人に、書き言葉または話し言葉で説明し仲介をする活動である。「PowerPoint」でのプレゼンテーションもここに含まれる。言語能力記述文は、関心のある分野の傾向と詳しい情報を述べる（B1）、複雑なデータを信頼できる程度に解釈する（B2）、それ以上は概念的に複雑な調査の多様なデータを解釈するとある。

当該授業では新書を読む活動において、担当する該当箇所について内容を発表している。該当箇所にグラフやデータが含まれる場合、この説明が必要になる。また、学期末に、読み切った新書についてのリーフレットを作成し、他グループにデザインの意図を説明する場面が想定できる。

3) テキスト処理

書かれた文章の内容を、他の人に、書き言葉または話し言葉で伝え仲介をする活動である。元のテキストの主要な点に注目して、情報とその論拠をまとめることである。言語能力記述文 B2 の特徴は、自分が関心のあるテーマについての難しいテキストを要約する内容となっており、Cレベルになると、テキストで表現されている態度や言外の意見を推測し、論理の微妙な差異を説明できるとある。

当該授業では、新書を読む活動において、発表担当者は授業前に書籍の内容についてハンドアウト1枚程度にまとめ、それを授業中にグループ内で伝え、グループメンバーと内容の確認や検討を場面での活動が想定できる。

4) 文書の翻訳

翻訳をすることで言語間での仲介をする活動である。言語能力記述文では、自分の専門的、学術的、個人的関心に合致するテーマの情報や議論を含んだ複雑なテキスト（B2）、Cレベルでは議論を含んだ複雑なテキストを対象にし、多様なニュアンスや言外の意味を捉えるとしている。なお、CEFR-CV2020における仲介活動で想定される二つの言語は、異なる別の

言語だけでなく、ある言語の二つの言語変種・ある言語変種の中の二つの言語使用域・もしくはそれらの任意の組み合わせのいずれであってもよいとされている。一つの言語の中でも行われる可能性があり、CEFR2001での通訳や翻訳の定義よりも幅広く仲介活動を捉えている。

例えば、書き言葉と話し言葉の仲介ととらえた場合、当該授業では、新書を読む活動において、書籍の内容についてグループメンバーと内容の確認と検討を行う際にこの活動を行うことができる。

5) ノートを取ること（講義やセミナー、会議など）

講義やセミナー、会議等で得た情報についてノートを取ることで自分自身のために仲介をする活動である。「この能力は学術的および専門的な活動を行う上で貴重である」（Council of Europe 2020 吉島・大橋訳 2024：85）と評されており、大学生であれば講義を受講する際に必要とされているスキルである。言語能力記述文は、ノートの取り方について、気づいた点を箇条書きにしたもの（B1）、重要だと思われる点を記したもの（B2）、内容の取捨選択が適切に行われたもの（C2）となる。ノートの正確さについては、自分で使える程度（B1）、正確なノート（B2）、内容の取捨選択を行い抽象的な概念やアイディア間の関係、言外の意味についても正確にとらえたもの（C2）へと至る。

当該授業活動では、講義やセミナー、会議等の情報は対象にしていない。ただ、読解ストラテジー「5. ときどき止まってメモする」の練習において、読んでいる途中で、自分があとから読み返せるように、段落ごとに内容や気づいた点をまとめる、重要だと思われる点を記すよう促す、強調するべき点にしるしをつける等の練習を行っている。効果的にメモを取る方法はノートを取るにあたって必要なスキルの一つだと考える。

6) 創作テキスト（文学作品を含む）に対する個人的な反応の表現

「創造的なテキスト」とは、文学作品だけでなく映画、演劇、リサイタルなどを指し、作品の内容を自分自身に仲介をする活動である。読書会や読書サークルなどで見られる活動である。言語能力記述文は、作品が気に入ったかどうか（A2）、どのように感じたかと述べること（B1-B2）や、作品と自分の体験を関連づけること、登場人物の解釈（B2-C1）などへと至る。当該授業では、論説文のみで文学作品は扱っていないため、活動はできない。

7) 創作テキスト（文学作品を含む）の分析と批評

作品の内容について、論拠を持って意見を述べたり批判的に批評したりするなどして自分自身に仲介をする活動である。言語能力記述文では、B1 レベルまでは内容の描写を重点的に扱うが、B2 レベルでは二つの作品の類似点や相違点を論じ、C レベルになると分析がさ

仲介（mediation）活動の検討

らに緻密になっていく。当該授業では、論説文のみで文学作品は扱っていないため、活動はできない。

4.2 概念／想念／思考の仲介

協働的な作業をしているときに、自分の知識や想念、思考を、他の人がアクセスしやすいように仲介する活動である。これはさらに下位分類され、グループ内で協働する場面と、グループ作業をリードする場面が提示されている。

1) グループ内での協働

・仲間との協働的やり取りを進める

目的のためにグループでの協働作業に協力し、グループ内でのコミュニケーションの仲介をする活動である。言語能力記述文では、質問したり他人の発言を奨励したりする（B1）、チームワークの目標を定め、それを達成するための方法を比較する（B2）とある。

当該授業では、授業前半の読解ストラテジーの練習と、授業後半の新書を読む活動、リーフレットを協働で作成していく活動において、それぞれグループで意見交換等を行う際にこの活動を行うことができる。また、教師がチームワークの目標を設定するように促したり、協働的なやりとりが生み出せるかを考えたりすることによってやり取りが活性化できるように支援することができる。

・意味構築のための協働

グループで話し合うときに、アイデアを出しやすいようにしたり発展させやすいようにしたり、話の内容が脱線しているときにもとに戻したりして、グループ内でのコミュニケーションの仲介をする活動である。言語能力記述文では、簡単な質問で他の人のアイデアや考えを発展させる（B1）、アイデアを協働的に展開させていく（B2）とある。

当該授業では、授業前半の読解ストラテジーの練習と、授業後半の新書を読む活動において、それぞれグループで意見交換等を行う活動や、リーフレットを協働で作成していく活動を行っている。新書を読む活動では発表者が書籍の内容についてまとめるだけでなく、グループでの議論点を予め提示しておくことで活動を促すことができる。また、どのように言葉をかければアイデアが出て発展した話し合いになるのか、話が脱線した時にどのように言葉かけるのかというアイデアを教師が事前に提示して活動を支援することができる。

2) グループ作業をリード

・やり取りの調整

グループのコミュニケーション活動をリードする役割が指定されている場合を想定してい

る。例えば、教師やトレーナーのような立場で参加者に平等にグループ内でのコミュニケーションの仲介をする活動である。言語能力記述文では、議論の中で発言権を割り振り参加者に発言をするよう促したり、作業をするための簡単な明確な指示を出したりする (B1)、必要ならば介入して作業に戻るよう指示を出す (B2)、穏やかに介入し一人が支配するのを防ぐ (C1) という内容になっている。

当該授業では、授業前半の読解ストラテジーの練習と、授業後半の新書を読む活動、リーフレットを協働で作成していく活動において、リーダーがグループ内の調整するよう、教師がモニターし、この活動を促す。また、教師は各グループ活動を行う前にやり取りをどのように調整すればよいかというアイデアを提示して、活動が円滑にすすむように支援することができる。

・思考・概念に関する話し合いの奨め

グループのコミュニケーション活動において、他の人が自分で新しい概念を構築できるように足場を掛けてグループ内でのコミュニケーションの仲介をする活動である。言語能力記述文では、誰かを議論に引き込んだり誰かの意見を尋ねたりする (A2)、より上のレベルでは論理的な議論を促したり一貫した流れを構築するために議論をモニターしたりするとある。

当該授業では、授業前半の読解ストラテジーの練習と、授業後半の新書を読む活動、リーフレットを協働で作成していく活動において、前出の「やり取りの調整」と同様に、リーダーがグループ内の調整するよう、教師がモニターし、促す。また、どのように言葉をかければ話し合いがスムーズにいくのかというアイデアを事前に提示して支援することができる。

4.3 コミュニケーションの仲介

個人的・社会的・社会言語的・知的に観点の違いがある場合のコミュニケーションを理解しやすくして上手くいくように仲介する活動である。コミュニケーションの仲介活動は以下の三つの活動に大別される。

1) 複文化的空間の構築の促進

異なる文化背景を有する当事者同士がコミュニケーションをするときに、中立的で信頼できる共有の空間をつくりその仲介をすることで、そのコミュニケーションが成功するための良好な環境を生み出す活動である。言語能力記述文では、会話を始めたり関心や共感を示したり、同意や理解の合図を送ったりすることで異文化間の交流を支える (B1)、異なる文化に対する多様な視点を尊重したり柔軟性をもちそれを態度として表明できる (B2)、より上のレベルでは社会文化的・社会言語的な差異を考慮した仲介ができるとある。

当該授業では、授業前半の読解ストラテジーの練習と、授業後半の新書を読む活動におい

仲介（mediation）活動の検討

て、それぞれグループで意見交換等を行う、リーフレットを協働で作成していく際に、多様な視点を尊重したり相手に柔軟に対応したりするなど文化的仲介者として働く場面が想定できる。

2) 非公式の状況（友人や同僚とのやりとり）での仲介者としての行動

公的・私的・職業的・教育的な友人や同僚とのやり取りなどの非公式な場面で言語や文化を超えて仲介をする活動である。言語能力記述文では、個人的に関心のある事柄で予測可能であり話し手が協力的であるならば、話していることの主な意味を仲介ができる（B1）、自分の関心のある分野であれば、文化的な特質も適切に解釈しながら仲介ができる（B2）、より上のレベルでは、多様なテーマについて社会的・文化的な含意も考慮した仲介ができるとある。なお、通訳を職業とするようなプロフェッショナルには、この尺度は適応されない。

当該授業でも、グループ活動は教師を交えて行っているわけではなく、その意味では非公式な状況であると考えられる。話し手の言い分が上手く伝わらないときには、他の人が理解できるように言い換える場面が想定できる。

3) 微妙な状況や非合意の状況でのコミュニケーションの潤滑化

デリケートな状況や第三者間が合意できない状況で、お互いが相手の立場を理解するように手助けをして解決に向かって近づくように仲介する活動である。言語能力記述文では、両者が同意に至っていないときや誰かが問題を抱えているときに、それを認識して「わかります。」「大丈夫ですか。」などの簡単なことばで共感を示せる（A1）、簡単なことばで妥協と合意が採れる（A2）、なじみのある話題において両者に考え方の説明を頼んだり、その説明に応えたりする（B1）とある。

コミュニケーションの難易度が高く、プロの外交官でなければ難しい活動のようにも見えるが、A1 レベルでの共感を示すなどは、当該授業でリーフレットを協働で作成していく際に、お互いが理解できるように手助けをする場面としてすぐに取り入れられるのではないかと考える。

4.4 新概念説明の方略

これまで検討してきた仲介の活動を円滑に進めていくには、仲介者として、人と人の間、テキストの間、言語の間を行き来しながら、その場の参加者や条件なども考えて方略をとる必要がある。新しい概念を説明する時には以下の二つの方略がある。

1) 既知の知識への関連付け

新たな概念を説明し仲介するときに既知の知識を活性化する、既知の知識と比較する・関

連づけて理解を促す方略である。言語能力記述文では、新しい情報がなじみのあることとどのような関係にあるのかを示せる (B1)、なじみのあることと比較対照させて説明できる (B2) となっている。

当該授業では、読解ストラテジー「3. 自分の知っていることや経験に引きつけて考える」の練習において、文を読みながら、自分の持っている知識や経験に当てはめて内容に対する理解を深めるように促すことができる。また、新書を読む活動でも、発表担当者が書籍の内容についてグループメンバーに発表する時にこの方略の使用を促すことができる。

2) 言語の適正化

新たなテキストへと仲介するときに、似たような言葉で言い換えたり専門用語を説明したりして理解を促す方略である。言語能力記述文では、他者が内容を理解しやすくするためにより平易な言葉で言い換えたり単純化したりする (B2)、より上のレベルでは、専門的で複雑な内容について適切な言語形式に適応できるとある。

当該授業では、読解ストラテジー「3. 自分の知っていることや経験に引きつけて考える」の練習において、文を読みながら、身近な言葉でいいかえて内容に対する理解を深めるように促すことができる。また、新書を読む活動でも、発表担当者が書籍の内容についてグループメンバーに発表する時にこの方略の使用を促すことができる。

3) 複雑な情報の解析

複雑な情報を仲介するときに、構成を示して全体像を示して理解を促す方略である。言語能力記述文では、短いテキストを一覧表に分けて提示して理解しやすくする (B1)、複雑な過程を細かい段階に分けて理解しやすくする (B2)、主要点を強調したりカテゴリー化したりして関係性を提示して理解しやすくする (C1) とある。

当該授業活動では、「6. 図や表を利用する」の練習において、文章の内容を図表に整理する活動を行うことができる。また、新書を読む活動でも、発表担当者が書籍の内容についてグループメンバーに発表する時にこの方略の使用を促すことができる。

4.5 テキストの簡略化の方略

1) 密度の高いテキストの解析

複雑な学術的または専門的な情報を仲介するときに、補助的な情報や例示、背景情報、説明コメントなどを加えることで理解を促す方略である。言語能力記述文では、日常的な話題についての一部を単純な例を示す (B1)、関心がある話題について例や推論、説明するコメントを付け加える (B2)、複雑でわかりにくい内容について、難しい点をより明示的に詳しい説明を加える (C1) とある。

仲介（mediation）活動の検討

当該授業では、読解ストラテジー「3. 自分の知っていることや経験に引きつけて考える」の練習において、文を読みながら身近な例を挙げて内容に対する理解を深めるように促すことができる。また、新書を読む活動でも、発表担当者が書籍の内容についてグループメンバーに発表する時にこの方略の使用を促すことができる。

2) テキストの流れの潤滑化

情報を仲介するとき、中心的な内容部分のみに注目することで理解を促し、重要な点を強調したり結論を引き出したり比較・対比したりする方略である。前述の1) 密度の高いテキストの解析とは逆の尺度となる。

言語能力記述文では、中心となる情報を特定して下線や強調のマークをつけ、他の人に情報を届きやすくする（B1）、有用で新たな情報をもたらさない部分を削除して、重要な内容を取りつきやすくする（B2）とある。

当該授業では、読解ストラテジー「3. 自分の知っていることや経験に引きつけて考える」の練習において、文を読みながら身近な例を挙げて内容に対する理解を深めるように促すことができる。また、新書を読む活動でも、発表担当者が書籍の内容についてグループメンバーに発表する時にこの方略の使用を促すことができる。また、読解ストラテジー「4. 焦点をしぼる」の練習において、文章を読むときに、焦点を絞り、効率的に読むことができるようにする活動でこの方略の使用を促している。「2. 知っているルールを使う」の練習においても、長文を読むときに接続詞、構成の型などのルールを使い、中心的な内容部分のみに注目できるように練習しており、文章を効率的に読むことができるようにこの方略の使用を促すことができる。「5. ときどき止まってメモする」の練習では、「PowerPoint (smart art)」や「Canva」などで使用されている記号などを例に、文字を○や□で囲むことや、→を使って言葉と言葉を繋げる、テキストに数字を書き込み整理するなど、しるしを効果的に使い重要な点を強調することでこの方略の使用を促すことができる。

5. まとめ

本稿では、CEFR-CV2020における仲介能力を養う教育について、日本語読解授業を対象に検討した。CEFR-CV2020の仲介の活動と方略が当該授業においてどの活動で実現可能であるかをまとめたのが表4である。この検討を通じて明示できたことは次の四つである。

第一に、授業でのグループワークにおいて、どのように協働的な学びを実現させていくのかということについて具体化できたことである。グループワークという枠組みさえ設定すれば協働的な学びが自ずと実現するわけではない。協働的な学びを実現するために、教師は条件の設定や言葉のかけ方など細部までにわたって気を配る必要があり、さらにそれを仲介の

表4 読解ストラテジー獲得を目的とした活動における仲介能力の育成の実現可能性

読解ストラテジー獲得を目的とした活動		読解ストラテジーの練習			新書を読む			質疑応答	リーフレット作成
仲介能力	新たなストラテジー学習【ストラテジー番号】	論説文(主に社説)の読解	読解のプロセスについてで意見交換	振り返りシート(毎授業後)	ポートフォリオ作成(学期末)	読解・内容要約作成・議論点提示	内容要約と使用した読解ストラテジーの発表		
テクストの仲介	1) 特定情報の引き継ぎ		○					○	
	2) テータの説明						○		○
	3) テクスト処理					○			
	4) 文書の翻訳						○		
	5) ノートを取ること	△ [6] ※一部該当							
	6) 創作テクストへ(文学作品を含む)に 対する個人的な反応の表明								
	7) 創作テクストへ(文学作品を含む)の 分析と批評								
概念の仲介	1) 仲間との協働的やり取りを進める		○				○	○	○
	2) 意味構築のための協働		○				○	○	○
	3) やり取りの調整		○				○	○	○
	4) 思考・概念に関する話し合いの奨め		○				○	○	○
コミュニケーションの仲介	1) 複文化的空間の構築の促進		○				○	○	○
	2) 非公式の状況(友人や同僚とのやり取り)での仲介者としての行動		○				○	○	○
	3) 微妙な状況や非合意の状況でのコミュニケーションの潤滑化								○
新概念説明の方略	1) 既知の知識への関連付け		○ [3]				○		
	2) 言語の適正化		○ [3]				○		
	3) 複雑な情報の解析		○ [6]				○		
テクストの簡略化の方略	1) 密度の高いテクストの解析		○ [3]				○		
	2) テクストの流れの潤滑化		○ [2]・[3] [4]・[5]						

仲介 (mediation) 活動の検討

レベルに応じて対応する必要がある。このような足場架けの方法を具体的にとらえることができた。

第二に、読解授業においても仲介活動を積極的にデザインしていくことができることが示唆された。仲介の概念を意識すれば、受容活動の一部である読解の授業においても、文章の作者との仲介、学生間の仲介、教師と学生の仲介、グループ間での仲介などが実践できる。この実践を継続していけば、多様な価値観が受け入れられ、互いに刺激し合いながらそれを発展させるような基盤が形成できるだろう。

第三に、読解ストラテジーを仲介の方略という側面から検討することができた。読解ストラテジーは仲介の方略とも関連があるものが多く、特に、「3. 自分の知っていることや経験に引きつけて考える」ストラテジーは、仲介の方略の複数項目に関連する内容であった。このストラテジーは、短時間で効率的に読むことを促すものではないため、試験対策のような時間内に読解問題を解く授業では取り上げられることは、あまりない。そのため、授業を履修したある学生は、筆者の話の流れからずれてしまう恐れがあるから、内容を自分にひきつけて捉えることはよくないと思っていたと語っていた。しかし、仲介の活動にあたっては、このストラテジーが仲介に関する複数の項目に置いて効果が期待できるものであり、積極的にこれを取り入れ、活用すべきであることが明示された。

第四に、言語や知識の伝達だけでなく文化的・社会的な考えにも留意した教育が必要であることを改めて認識できた。相手の立場を文化的・社会的なギャップを超越して理解するように仲介する活動までもがここには含まれている。近年は特に翻訳ツール等の発達により、異なる言語の伝達が容易になってはいるが、文化的・社会的な背景まで考慮されることは少ない。本稿で取り上げた仲介という概念を念頭に置いた教室活動を行っていくことが、現代の言語教育のあり方のヒントになるのかもしれない。

CEFR-CV2020 は、例えば 4.1 テクストの仲介 4) 文書の翻訳において、翻訳をすることで言語間での仲介をする活動のような、これまでの外国語教育の伝統的な方法をも否定せず、取り入れ、教師や学習者を含めた関係者の気づきや配慮、コミュニケーションを促すよう意図されている。CEFR-CV2020 の言語能力記述文を安易に基準として使用するのではなく、本稿での検討結果をもとに、仲介の概念を取り入れた読解授業を状況に応じて設計し、多様な価値観や文化への気づきを促すよう、今後も引き続き進めていきたい。

付記

本研究は、JSPS 科研費 JP20K21994 の助成を受けた。

注 _____

1) CEFR-CV2020 では、「仲介」のカテゴリーや言語能力記述文の追加以外にも、「複言語・複文

- 化能力」の領域の構築や「オンライン交流」, 「文芸作品への反応」などが追加されている。
- 2) 詳しい活動内容は三宅 (2022a) 三宅 (2022b) を参照されたい。なお, この授業に参加した学生に対する使用状況の調査によると, 学習者の使用経験等から得た経験知と授業で得られた実践知が関連づけられているストラテジーとそうでないストラテジーなどに分かれる傾向にあったことが報告されている (三宅 2023)。
- 3) 用語の日本語訳については, 吉島・大橋・森沢 (2024) を採用している。

参考文献・資料

- 江澤照美 (2020) 「日本のスペイン語教育と仲介活動 (Mediation) — 『CEFR 増補版』からの検証—」『ことばの世界 愛知県立大学高等言語教育研究所年報』12, pp. 59-70.
- 櫻井直子・奥村三菜子 (2021) 「CEFR Companion Volume with New Descriptors における「仲介」に関する考察」『日本語教育』178, pp. 154-169.
- 西山教行 (2018) 「CEFR の増補版計画について」『言語政策』14, pp. 77-80.
- 三宅若菜 (2022a) 「ブックトークを通じた読解ストラテジーの獲得支援」『大学教育学会第44回 (2022年) 大会発表要旨集録』pp. 76-77.
- 三宅若菜 (2022b) 「大学生に対する読解ストラテジーの獲得支援—新書を読む活動を通して—」『人文自然科学論集』151号 pp. 153-162.
- 三宅若菜 (2023) 「読解授業における大学生のストラテジー使用意識—授業前後の使用傾向からの示唆—」『人文自然科学論集』154号 pp. 81-94.
- Chamot, A.U., Barnhardt, S., El-Dinary, P.B., & Robbins, J. (1999). *The Learning Strategies Handbook*. New York: Addison Wesley Longman.
- Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*, Cambridge University Press (吉島茂・大橋理枝・編 (2014) 『外国語の教育Ⅱ 外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (追補版)』朝日出版社)
- Council of Europe (2020) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment: Companion Volume* <https://rm.coe.int/common-european-framework-of-reference-for-languages-learning-teaching/16809ea0d4> (2024年7月24日アクセス)
- 日本語訳: 吉島茂・大橋理枝・森壯也訳 (2024) ISBN: 978-4-600-01379-0 <https://www.goethe.de/resources/files/pdf328/cefr-cv-jap-mit-cover-finale-neu-v3.pdf> (2024年7月24日アクセス)
- 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」(2018) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm (2024年7月24日アクセス)